

## 平成16年度第2回大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会 議事録

日 時：平成17年3月25日（金）9:30～11:30

場 所：奈良県文化会館 第1会議室（会議は公開で行われた）

### 出席者

委員：6名中4名出席

座長 村上 興正 前京都大学理学研究科講師

委員 小船 武司 日本野鳥の会奈良支部長

鳥居 春己 奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター助教授

横田 岳人 龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科講師

（敬称略）

### 関係機関

奈良県農林部森林保全課森林環境保全グループ 伏原 隆 調整員

若山 学 主査

三重県環境森林部自然環境室 橋詰 奨 技師

上北山村地域振興課 池岡 貴之 主事

環境省：自然環境局近畿地区自然保護事務所

所長 亀澤 玲治

奈良支所長 山本 範廣

野生生物科長 徳田 裕之

公園保護科長 岩田 次治

施設科長 岩本 秀夫

環境技官 石鍋 健

事務局：財団法人 自然環境研究センター

上席研究員 黒崎 敏文

上席研究員 永津 雅人

### 議 事

(1) 平成16年度調査結果について

- 1) 生息状況モニタリング調査
- 2) 植生状況調査
- 3) 個体数調整
- 4) 捕獲個体分析

(2) 平成17年度調査について

- 1) 個体数調整
- 2) モニタリング調査

事務局：それでは只今から平成16年度第2回大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会を開催い

いたします。本検討会は財団法人自然環境研究センターが事務局をいたします。よろしくお願ひします。まず環境省近畿地区自然保護事務所の亀澤所長よりご挨拶をいただきます。よろしくお願ひいたします。

■挨拶（環境省自然環境局近畿地区自然保護事務所長）

皆さん、おはようございます。本日は年度末の何かとお忙しいところを、今年度第2回の「大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会」にご出席をいただきまして大変ありがとうございます。前回11月の第1回検討会の時に大台ヶ原の自然再生推進計画のパブリックコメント段階の案についてご紹介をさせていただきましたが、その後パブリックコメントや先生方の意見などを踏まえまして、必要な修正を経て今年の1月の自然再生の検討会で承認をいただき、決定をいたしました。シカの計画につきましては、シカの保護管理計画をそのまま取り込んだ形で再生の計画を作成いたしました。今後は再生の推進計画に沿ってシカ対策も一体化をした形で大台ヶ原の自然再生として考えていきたいと思っております。この検討会につきましては、長期的な意味としましては、今まで通りニホンジカの保護管理のフォローをしていただくということで変わりはないのですが、自然再生推進計画を一体でまとめたこともありますので、具体的な形につきましては自然再生を総合的に推進していくという観点から、また来年度考えていきたいと思っております。本日は議事といたしまして今年度の調査結果と来年度の調査の予定についてご検討いただく訳ですが、今年度の結果に関しましては計画に沿った作業の実施状況を、まず説明させていただきます。その中で個体数調整に関しましては、第1回の検討会の時点での40頭の捕獲をしていましたが、その後11月から12月の始めに作業に入りまして、積み増しを8頭捕獲し、48頭まで捕獲しております。できれば3月中にもう一度捕獲に入りましたのですが、雪が多くて捕獲には入れないという状況ですので、今年度は48頭ということになりました。平年度ベースでいうと45頭の計画ですから、それはクリア一しましたけれども積み増しをした分、つまり初年度の積み残し分を積み増した分までは、達成はできなかったという状況であります。そういうことを踏まえまして前回の検討会でお話しにしておりましたが、捕獲用の新たな柵などについても、改めて議論をいただければと思っております。それから今年度の捕獲頭数、捕獲を踏まえた個体の分析の結果についても報告を申し上げますが、それらから推定される生息数等についてもご報告しまして、それを踏まえまして来年度以降どのように進めていくかということについてアドバイスをいただければと思っております。よろしくお願ひいたします。

■出席者紹介・資料確認

(省略)

■議事

村上座長：早速議事に入りたいと思いますが、その前に資料1の第1回検討会の検討委員の意見についての対応表の説明をお願いします。

(第一回検討会の意見対応について事務局説明)

村上座長：只今の説明で何かございますか。前回論議したことを踏まえて書いてあると思いますので、これでよければ、次の議題に進みます。議事(1)の平成16年度調査結果について 1)生息状況モニタリング調査について事務局からお願ひいたします。

(事務局より資料2「(1) 平成16年度調査結果について」P1-12を説明)

村上座長：説明ありがとうございました。資料 2 のページの順番に議論した方がいいと思います。3 ページまでの大台ヶ原における生息密度、その主なものは前回と同じですが、違っていることはきちんと再調査していただいたこと、特に 11 月の糞虫の影響を受けないだろうとされていた時期に調査を行ったら、こういう結果になった。これは予測通りになったという話です。他に何かありますか。そうしますと 4 ページから周辺のシカの生息状況が少し見えてきたので、この辺について議論した方がいいと思います。ルートセンサスの 4 ページから 9 ページについて何かありませんか。

鳥居委員：表の 4 ですけれども、狩猟のところで川上村、上北山村にそれぞれの村の中で捕れているというのは確実に分かっていますか。川上村の方がシカを捕ったということであって、川上村の中で捕ったかどうかは分からぬですね。

奈良県：いえ、有害駆除に関しては分かります。

鳥居委員：それは確かですね。

奈良県：確かに。

鳥居委員：下の方は他で捕っている可能性がありますよね。

上北山村：メッシュ報告があり、その積み上げになります。

鳥居委員：そうですか。

村上座長：単純に比較する訳にはいかないでしょうけど、三重県と奈良県を比べると奈良県の方がやや頑張っている気がしますけれども、これは三重県側どうなのでしょうかね。

三重県：三重県側は、2001 年度について捕獲はあるのですが、県全体で何頭という形でやっているため、数が足りてないという形になります。

村上座長：メッシュが不明なため入れてないということですね、狩猟に関してね。

三重県：奈良県側に比べると少ないようですが、三重県においてはイノシシが森に入るとイノシシを捕る捕獲圧がかかるという傾向がありますし、あまりニホンジカは狩猟対象とはなりにくい感じです。

村上座長：特定鳥獣計画を作るか作らないかというような問題が、やはりここで論議すると意識するようになるから、多少成績が良くなるのですかね。その他大台ヶ原周辺で抜けているところが多いですが、ここはもう少し入れられませんか。すごく難しいですか。この地形がどうなのかもよく分からない。この東側のところが抜けていますね。

横田委員：地形のところ、使いやすい道路がどうなっているかという感じになっているとかを重ねてみないとできない。

村上座長：ここは意識して欲しいですね、データとしては。ブランクが大きいので気になりますね。今日は獵友会の方は来られてないですか。獵友会の方が来られていたらこの辺のことはよく分かるのですけどね。

小船委員：そこは国有林ですね。

村上座長：国有林ですか。国有林では捕られてないですか。

小船委員：たぶん捕っていないです。

村上座長：捕っていないですか。三重県の国有林では。

横田委員：事故があつて以来捕ってない。

村上座長：あれ以来国有林の捕獲が止まったという話ですね。ということはそこにたくさん居たりしたら困りますね。

環境省：ちょっとよろしいですか。国有林の方は今日来られてないですが、この間の自然再生の最後の検討会で、近畿地方森林管理局の方が発言されていましたが、ここは生態系保護地域になっており、やはりシカの影響がでているという認識は持ってらっしゃいますので、その地域の見直しを少し考えるというお話は担

当の方がされていました。それを来年度ぐらいから始めたいというような話は伺っております。

村上座長：生態系保護地域を外すと言うことですか。

環境省：いえ、多分そこは保護地域だけれどもシカの影響が顕著になりつつあるので、そういうことも考えたいという趣旨だったと思います。

村上座長：地域をはずすのではなく、むしろその中の生態系を守るために、被害として認識してシカを捕れる方法を出すということですね。これは相手があることですので、その部分がやはり難しい。一生懸命周りを捕っているのにその部分だけ捕れない、密度がいつまで経っても減らなくて困りますね。

：狩猟によるものだけしか載せなかった理由というのはなぜでしたっけ。

事務局：狩猟はメッシュデータでありますので、メッシュに載せられますが、有害駆除は市町村単位で集計されているので、どこで捕られているのかポイントが分からためです。

村上座長：京都では場所を特定して、それでポイントを落とせという指示をして、補助金を出すからね、それは分かりますよ。むしろ狩猟よりよく分かる。

事務局：それにつきましては、今後分かる範囲で載せたいと思います。

村上座長：そのデータはあるはずですよ。そのデータを今後はもっと拾ってくれないですかね。そうしないとせっかくそのデータがあるのにもったいない。次回までにそのデータをいれて、それから統計したものを入れるという2つの方法があります。そうするともう少しみえてくると思います。周辺もかなり頑張って捕獲しているということは分かりますね。密度のモニタリングに対しても、もう少し周辺が欲しいですが、これはなんとかならないのでしょうかね。要するに奈良県、三重県の方の問題ですね。できたら大台ヶ原の周辺を捕獲して細かく密度が分かるような場所を設定してもらえないでしょうか。環境省の方で交渉してもらえないでしょうか。この委員会としてもやはりここは必要です。この部分が抜けて大台ヶ原の一部だけを見てものを言うのはちょっと危険だと思います。地域個体群という観点からすれば、もう少しこの抜けのところと、あと1カ所づついれてもらえば、もう少し全体が見えてくると思います。それは話し合いをしてもらえませんかね。

環境省：シカは行政界関わりなく動きますし、大台だけで考えても意味がないので。そこは両県の協力を得て、より広く見られるようにしたいと思います。

村上座長：アプローチの観点から、なるべく労力を少なくして効果があるような点を増やしてもらいましょう。やはりここは県境ですから一番地域個体群が見え難いですよ。本来地域個体群というのは県境をまたがって全体をやらなければならぬ。特定鳥獣は県で作りますから。これはいろいろ問題になりますね。だからここは、極端に言ったら、大台を中心とした形で、もう一度組み直す調査を環境省がやるか、問題をチェックしたらいかがですか。隣接県のところはいつも問題になりますよ。

環境省：それは両県のご意見も聞きながら相談をさせていただきたいと思います。

横田委員：2002年と2003年とほぼ同じところに色が着いているということは、毎年ここを調査されているということですよね。

奈良県：奈良県の場合は固定プロットを設定して調査しています。

村上座長：そうでしょう。だから、ここでプロットを増やしてやってもらいたい。

横田委員：大台のシカの会議で、周辺地域にもプロットがあったはずで、周りが1年単位でやっているものと、5年くらいでやることになっていましたよね。まずこっちで持つていればいいのですけど、シカ会議で設定したプロットの方を毎年やる形で、周辺を入れるというのが一番近道だと思いますね。一定間隔で一つのところだけ違うことをやっていると見えにくくなりますね。やはりここは協議し

て取り入れるような格好でやつたらいいと思います。

環境省：やはり相談をして、良ければさせて下さい。

村上座長：これは今みたいな意見を含めてですね、今後のことを考えると割と大きな問題なので、少し話し合っていただいて、その結果をまた出してもらうということです、それでいいと思います。

鳥居委員：平成17年度調査の最後に書いてありますよね。

村上座長：これは相手のある話なので、調整が必要なのでここで話していただいてもしようがないので、まずは調査して、それをみてなるべく入れる方法というのを実現するということで。極端に言って、ここで無理だったら2年に一回でもいいから点をとるとかね。こういった可能性を探ってもらうということにしておきましょう。そうしますとこれで9ページまでいきましたから、ルートセンサスに行きましょう。何かございますか。

鳥居委員：印象として減っているように思えますか。40、50頭捕っていて。

村上座長：これを見たら雌が多いでしょう。やはり個体群としてのポテンシャルがすごいですね。すごい数ですね。これはやはり増えますよ。

事務局：鳥居委員からの質問ですけれども、昼間歩いている分には本当に減ったと思います。見えなくなったというのは事実です。どこを歩いても。観光客の方に聞いても、見られないね、という言葉はよく聞くようになりました。先ほど言いましたように、夜誰もいないときにライトをつけながら見ますと、林内よりもどちらかというと林内からちょっと内山に入った草地にシカが寝そべっています。結構いつも決まった場所、先ほど言いましたようにたとえば牛石でしたらその辺に何頭もいるといった状況です。ですから両方合わせるとどうなるかというのはちょっと難しいですけれども、そう増えてはいないだろうし、横這いというぐらいだと個人的には思っております。

鳥居委員：もうひとつはルートセンサスを行って、雄と雌ですごく偏りがありますよね。このルートセンサスの結果は、大台の全体を反映しているように思えますか。

事務局：一応雄がいる時期にということで、この時期にわざと最も雄が来るということでやっています。先ほど言いましたように、雌が本当に多くて雄が少ない。私どもが入りだした頃に比べて雄が少ないような感じがしています。以前は10頭くらいの雄の若い群が結構見られていましたけれども、この頃そういう雄の若い群がなかなか見ることができません。

鳥居委員：雄の若い群れが見られないというのは、どういうことを意味するのですか。

事務局：あとでご説明しますけれども、私どももここ三年間で結構それなりに雄を捕らさせていただいている。雌はそれなりに定着性があるので、そこでずっと繁殖を繰り返しながら妊娠、子供を出産している。子供の体重や性比のデータがありませんが、生まれる数はそんなにかわっていません。ただ雄を私どもが結構捕獲していますので、それによってもしかしたらその場所を嫌っている、つまりいるのかもしれませんけれども会えない、目撃できないという状況はあるかもしれません。ただ再来年になりますと区画法で生息密度調査をもう一度しますので、前回とどういうふうに性比が変わったかというのを、もしかしたらもう少しあつさりとしたデータでお示しできるかもしれません。

村上座長：昼間見られなくなったのはやはり捕獲の影響でしょうね。きっと用心したのでしょうかね。全然大丈夫と思ったらどうも危ないと思ったのでしょうかね。これは1ヶ月ごとに指標としてどうかという形でやっていますから、特にこのデータだけみてどうかと言うのは難しいです。雄雌の構成が分かるというのが一つのメリットなので続けてみて、その中でたとえば性比がどうなっていたかとかですね、子連れがどのくらいの割合で入ったとか、そういうことについて長期的にデータを集めることにしてみませんか。そう言う意味では、2003年度

のここまで、3年度分の「雄雌」「0歳」「不明」のこれと同じ表を作つてもらつた方が分かりやすい気がしますね。比較用にきれいにしておいてもらい、今この構成がどうなつたかという問題を議論しましょう。でも次回は2003年の分を載せてほしい。これは2002年度さえ分からぬ。2002年度の分はやりましたか。

事務局：そのもう少し前にはやっていますけれども。

村上座長：そういうデータを一回並べておくといいんですね。

事務局：はい、分かりました。調査は1998年頃からぼつぼつとやっています。もう5年分くらいのデータはあります。

村上座長：柴田さんのデータを含めて長期的なものを見てみないといけない。それで数の問題もそうなんですけれども、雌雄比とか、子連れ比とかを見た方が、個体群の動向としてはおもしろいと思います。それは割と重要な資料になるかもしれませんので、次回やって貰えますか。

事務局：はい、分かりました。

村上座長：それは新たにそのとき検討するということにしましょう。そうすると12枚目の推定生息頭数ですが、この値をどう読むかという話で、増えてはいないなという話でまず一つですね。でもそんなに顕著に減ったとはいえない、多少減る傾向があるかもしれないという程度の値ですね。増加傾向が一応止まったという感じはありますので、それは捕獲の影響、単にその箇所だけではなく周辺を含めた捕獲の影響というものが徐々に出ているのだろうということです。それと、この前も議論がありました、ミヤコザサがあるところとないところではつきりと差が出ていますね。その場所だけが見事にでてきたというのが今回の特徴ですね。あと捕獲の仕方を密度の高いところにシフトしながら考えるということを、もうすでにそうしているはずですが、さらにそういうことも考えなければいけないということですね。そうすると胃内容物分析につきましては、これは柴田さんは何と言つていましたか。意見があるでしょう。

事務局：柴田先生からは意見をいただいてないので。

村上座長：そうですか。これはちょっとおもしろそうな結果だと思うのですが、どう読むかが難しいですね。

鳥居委員：昨年はすごく枯れ葉が食われていたんだけど。枯れ葉とドングリがすごく出てきたんだけど、今年は全然出でないです。

村上座長：これも前のデータを参照したいですね。例えば前はどうやつたか、どう変化したか、そういうのを入れないと、これだけ見たのでは何とも分からぬですね。ただ、ササがものすごくメインな食物であるということだけは明確ですね。それでグラミノイドは春が良いというのも当然といえば当然の結果ですね。でも樹皮はトータルにすると結構あるんでしょうね。

鳥居委員：今年は樹皮の量が秋に多いですね。以前とは違うような気がしますけど。

村上座長：やっぱり冬のデータが落ちてしまうということね。冬は大変ですよね。でも、冬はもっと樹皮の方が高まるのでしょう。あまり雪が降ると下へ逃げますからね。要するにササが完全に被われてしまうと食べ物がなくなつて下へ行きますね。テレメーターの調査は冬にはやらないですか。

事務局：それに関しては、後で説明させていただきますけれどもGPSを今回使おうと思っています。冬のデータもとれます。

村上座長：データロガーは入れるわけですね。それで自動方探でしょ。

事務局：それは詳しくあとで説明致します。

村上座長：そういうものがあれば多少はちょっと面白い話ができますから。

事務局：後で説明させていただきます。

村上座長：後の17年の計画に入っているようなので、そこで議論したいと思います。他に

ございますか。

横田委員：樹皮食いの話ですけれども柴田先生と安藤さんが行った調査で夏が多かったですね。これは秋の方が多く見えるのですけれども、台風とかで枝が落ちている場合、そういう枝を結構かじっている感じですね。そういうのが今年多くて、秋に樹皮というか枝の皮を食べているのではないかという気がしたのですけれども。ちょっと枝が多かったような気がしますので。やはり樹皮をいきなりかじるのは難しいでしょうし、いろんなところに枝があまりないですから、落ちてきている枝を食べやすいので食べていると思います。

村上座長：要は枯れ葉と一緒にですものね。捕獲頭数はどれ位ですか。

事務局：48頭です。

村上座長：48頭全部入っているわけですね。

事務局：はい、48頭全てのデータです。各季節も16頭づつです。

村上座長：これは親と子とか雄と雌とかには分けていないけれども、そういうのは気にしていますか。

鳥居委員：していますけど、今はサンプル数が少ないので。

事務局：もう少したまた段階でやらないと、幼獣などは季節に1、2頭だけになってしまします。5年くらいたってからやった方が一番良いと思います。

村上座長：幼獣は多少違うでしょうね。どういう考え方ですか。

鳥居委員：そんなに大きな差はなかったと思いますが、ササが多量に入ってしまうので。

村上座長：それで幼獣はごまかされてしまうということですか。樹皮食いなんかするでしょうか。

鳥居委員：遡って見てみます。

村上座長：その辺はデータがたまつたら発育段階による差とか、雌雄による差とかを気にしてちょっと見て欲しいですけれど。これは片一方でやっておく必要がありますね。色々な事を考えるのに資料としては面白いですから。これはひとつしたら管理問題に結びつく可能性がありますから。なければここまで終わつたのですけれども。それでは次は植生状況調査の説明をお願いします。

(事務局より資料2「(1) 平成16年度調査結果について」P13-17を説明)

村上座長：では、17ページまでについて、ご意見ありませんか。

小船委員：ミヤマシキミが実質的に食べられているようです。食べないものでも案外、食べるということはあるのですけれど。実質的にミヤマシキミが出るとなると、ひとつまた今後に続く問題になる。

事務局：先生の言われるとおり、通常ミヤマシキミなどはシカが忌避するということで、それを本当に食べ出してくれるようであれば要注意です。特に金華山のほうでも、今まで食べなかつた植物を、最後には全部食べ出すということになっています。先生の言う通りで、そういうことを見る植物として押さえるべきだとは思います。今後注意して見ていきたい。

小船委員：ブナ林の方で、地上に一番量が残っているのはミヤマシキミですよね。それを食べる方向に変化したとすれば、これは大きな問題ですね。ミヤマシキミしか林床に無い所で。

村上座長：シカに食べられてなくなったものというのはあるのでしょうか。例えば、ブナ林の中の下層植生でシカの影響を受けてないものは分かりますか。昔のリストなどはありますか。

事務局：ちょっと調べてみないとわかりません。できたら横田委員にアドバイスをもらいたい。昔、下層植生のコドラー調査をしていて、そのデータと現在のデータを比較したら種類がなくなつた、というようなデータはありますか。

横田委員：同じ場所で調査されているものがないですね。どういう種類の植物があるかというコドラー調査は、70年代と80年代にあります。それもどこまで大台ケ原としてやったのかが不明なところもあるので、単純に比較はできません。自然再生でそのへんは変更がありますから、この単位であればかなり減っている種類が出ているかなと。もうこれでなくなってしまったものは、ここにはたぶん出てきてないので。

村上座長：例えばこの村にだったらあるけど、ないのはという話もありますか。

横田委員：紀伊半島のこの地域のラインにはあってしかるべきというほど普遍的な種類というのが分かるほど研究もされていません。これがというふうには言えない。

村上座長：これは少レブナ林の下層植生についてのデータを集めなければいけない。それともう一点気になるのですけど、ウサギの食痕は区別するようにしていますよね。見事にナナメに切れますから。

事務局：ウサギはわかります。

村上座長：これは中には入っていないですか。

事務局：はい。

村上座長：それで気になったのですけど、ウサギの食痕が見られたものは、ウサギとして出してもらったほうがいいのではないかと。というのはウサギの影響があると思う。だからそれは気にして、同時にとつておいたほうが良いと思うのです。

事務局：次回から表記をシカなのかウサギなのかとか分かるようなかたちで、シンボルをつけます。

村上座長：そうしましよう。高さも全然違うからすぐ区別できる。というのは静岡県で防鹿柵を使っても少しもシカの被害が減らないと言うから、現場で食痕を見たらナナメに切れているのでこれはウサギの被害ですよと言ったら、その人はこの辺にウサギはいませんよと。でも探したらいっぱい糞がありました。そういうことがほとんどです。だからそういうことを考慮したい。植生に対する影響としてウサギはたくさんいますから。このごろは減っていますけど昔はすごかつたですね。先ほども言ったように。そういう意味で、シカとウサギの区別は気にするべきだと思うのです。他にございますか。だから結局はシカとの関係上、データを積み上げていって、それで後から、やっぱりこうなのだと客観的に見られる。今までこういう剥皮だけ言っていまして、植生があまり見られていなかったので、そう言う意味で科学的に評価しようと思います。ここは、カモシカはいますか。

事務局：殆どいないと思ってよろしいと思います。

村上座長：殆どないと考えてよいわけですね。そのことも気にするべきですね。シカが増えたらカモシカはだいたい嫌がってどこかへ行くんですよね。でも、共存している場所もある。そのことを考えておかないと。シカとカモシカの食痕が区別できないから。シカというのはやはり特定した方が良いと思います。

横田委員：表13ですけれど、出現種数はこの○なり△なりが打ってあるところの種数が上がっているんですが、食痕が見られた種数のところには△は数えられていないんですね。

事務局：はい、ですから例えばNo.4のところは△ですけれども、シカと特定できなかつたものも数えています。

横田委員：それでNo.4のところは○ということで。それが分かりにくい。ウサギのことを入れるときに、そういうことでお願いします。

村上座長：やはりこれはシカによるとか入れなければいけないね。ウサギによる食痕とか、そういう形で分けて書いてもらえますか。他になければ、17ページまで進んだので、次は剥皮のことについて。これは環境省でお願いします。

(環境省より資料2「(1) 平成16年度調査結果について」P18-22を説明)

鳥居委員：これは累積ですよね。

環境省：そうですね。要はその倒木の本数が書いてありますが、50本だったら50本のうち何本が倒れたか、枯れたかということで割合を出しております。それから幹被害の場合、対象木は例えばこの一番上の10番だったら50本ですが、その中で枯れたものがでてきますよね。そうすると枯れたものがその剥皮の割合がたとえば3の状態で枯れていれば、ずっと3のまま計算をして、新しく剥皮されたものだけが分かるような形で計算をするようにしております。

鳥居委員：上から4番目の45っていうのから44.9にさがっている。15年から16年に。

村上座長：幹被害の割合ね。

環境省：これはチェックします。

鳥居委員：累積なら構わないですが、打ち間違いなら。

村上座長：分析もいいけれど、新規被害のデータもほしいですね。

環境省：新規被害が分かるような形で、一応この増えた部分が幹の新規被害という平均で各コドラーで、という計算の仕方をしています。

鳥居委員：例えばこないだ言ったのが、10本ある中で被害率の割合が10本のうち8本だったら10%になってしまっても出るんですかね。

環境省：いや、例えば1本が3、もう1本が0、だから2とか1とか、全部平均して出ます。

鳥居委員：そうすると今言われたみたいに0だったものが、新しく被害を受けたのはこれだと表現できないですね。

環境省：いや、次の年を見れば。その1本1本を。

鳥居委員：私が言ったのは、平均してしまっていると、70本コドラーがあったときに何本の被害があってそういう値になっているかということは分からぬと思ってるんです。

環境省：一応、個表はすべて平成7年度から1個1個ナンバリングしたものが、どうなっているかというふうにやっていますので、追えることは追えるのですが、その1本1本をどのように拾っていくとよいのでしょうか。

村上座長：例えば、枯死木だったら平成15年で38.0、平成16年で46.0でしょう。そうするとこの間は8%増加したことになるわけね。その前は2%でしょう。そういう形で各年どれだけ新規被害があったかということを追跡したら、最後の値が46になったんですね。そうすると毎年毎年の新規被害を出していくとその変動が分かりますね。そのときにたとえば今年のものをみたら8だからちょっと大きい。その前のものを見たら2%、その前4%、その前0というふうに見ていくと、新規被害だけを並べてみるとその年度ごとの特徴が出てくるということです。そういうふうすると、たとえば台風が来たという話が見やすくなる。累積被害でみるとものすごく分かりにくいくらい、新規被害をまず抽出して、その一覧を作つたらどうかという話です。場所ごとにそうしてね。それで確かに台風の影響を受けたところ、場所によっては受けなかつたところもあると思いますしね。そういうものが新規被害を見たら分かるわけですよ。それで風が強い所はばたばた倒れるだろうし、そういう問題が分かるだろうということです。単なる累積だけというのはものすごく見にくいくらい。

環境省：はい。

村上座長：それとおそらく、これは予測カーブとしてはフィットするでしょうね。平均値としては、いわゆる死亡曲線の形になりませんか。そういう予測をしたことありますか。時間に対して。

環境省：それはないです

村上座長：やはり予測できるでしょう。たとえば直線なんかあるんだからね、そうしたら年によって、そのままいったら何年後はどうなるのか、予測できるでしょう。

環境省：今までのデータを全部入れて、傾きを出して。

村上座長：直線になるのだったら。そろそろそういう風にね、予測データを含めた形にして、例えば対策したことによってどのくらいそのカーブが緩和されたとか、そういうような話をしていく方がいいと思いますね、シカのシミュレーションとしては。これだけデータがあったら、簡単なことですよね。たいしたモデルではない。まずその単純なモデルをやってみたらどうです。他に何かありますか。時間もないでの個体数調整について説明願います。

(事務局より資料2「(1) 平成16年度調査結果について」P23-29を説明)

村上座長：まず個体数調整について。目標頭数45頭は達成したけれども、積み残し分の16頭のうち、3頭だけ捕獲したという話ですね。これはこの前から問題になつていて、捕獲方法の検討が今後議論になるということですね。3月に雪が降ったのはしょうがないですね。これも天候のことですから。雪によって多少、ここでは移動するのかな、しないでしよう。何か他にありますか。なければその次の捕獲個体の分析結果のところに入りたいと思います。これは全部込みにして話していきましょう。

鳥居委員：その2歳ジカのRKFIが秋にすごく低いですよね。この秋の値の低さというのはなんですか。この場合の季節は。

事務局：23ページのところに書いてありますけれども、9月13日から18日に捕った個体です。

鳥居委員：そうではなくて、表の20です。この場合の春夏秋冬というのは何月を春にしているかということです。

事務局：はい、この春に関しましては4月から7月です。夏が8月から9月。ただ、毎年同じ月に入れていませんので。例えば8月の下旬から9月上旬に捕獲作業でとられたものは、捕獲された日ではなく、1回の捕獲作業期間で集計しているため、実際の捕獲月と若干異なります。それで秋が10月から11月、冬が12月にしています。

鳥居委員：でも、もう少しオスは秋に高いような気がするのですよね。

事務局：ただ、繁殖期になると雄はなにも食べなくなつて下がると言われていますので。ただですね、表19を見ていただいて分かるようにいつも雄は秋20から30という数字です。

環境省：表19の脚注にある季節区分と今の話と若干ずれがあったと思いますが。

事務局：先ほどの問題がありますので、上の方に5、6から7、9って書いてありますので、表19の下にですね。それで若干ずれています。もしなんでしたらあとで両方ともきれいに変えますけれども、そこがちょっとずれていたものですから、サンプル数の都合上組み込んでます。ただ大台ヶ原での雄を見ているとそんなに体格的には小さいとは思わないんですけども。ただ、体重は結構ありますし、体も大きいのは事実なんですよね。特に秋に見ていただいたら分かるようになります。ですからもしかするとさつき言ったように繁殖にエネルギーを本当に使っているのかどうかというのが分からんんですけども、低いのは事実です。

村上座長：サンプル数は今どれ位ですか。たとえば雄の成獣は。

事務局：19ページの方に書いてありますように、これを足せば良いのすけど、たとえば夏だけでいえばもう14、すみません5ですね。そういう数字になつてしまします。

村上座長：カッコしてサンプル数を入れておいてもらえませんか、表20のところに。

事務局：分かりました。上に書いたものを下にもいれます。

村上座長：信頼性がどの程度かということを知りたいので。サンプル数が増えるとある程度信頼ができますけど少數サンプルでやるとこの値が不安定なので、サンプル数を入れて下さい。

事務局：はい。

村上座長：それが増えてきたら、標準偏差と標準誤差を入れると変動差とかが分かるんですよ。将来的にはそういうものを入れていくという考えでいきましょう。とにかくオスの成獣は夏季に上がるんですが、全体的に低いような感じがしますね。念のために他地域のものを一回、この辺では小豆島を取っていますから。

事務局：比較にならないと思います。ただ、ちなみに小豆島のデータは私ども仕事をさせてもらっていますので分かるのですけれども、例えば雄の成獣、2歳以上ですね、10月、秋で考えますと80はいきます。

村上座長：いや、だからね、あそこはドングリが豊富なんです。シイカシがものすごく多い。だから小豆島の方がむしろ特異で、ちょっと参考にならないと思うんですけれども。それ見てるから、低いなと思いました。

事務局：同じ紀伊半島を見ても、和歌山県しかデータがないです。他の地域ないので、ここ近辺はどこも。

村上座長：京都もとっていないので、あと栄養状態を取っているところは割りと少ないんですよ。

事務局：あとは千葉県ですね。ただ千葉県も照葉樹林帯であそこもドングリがすごい。

村上座長：そういうものをとつていかないとやっぱり見事に反映されますからね。やっぱり森林というのは、シカにとっては影響するんですよ。そういうのを見るためにはこの値が面白いと思うんですよね。今、京都、滋賀、福井でも全部関係しているんですがね。なかなかそこまで行きません。他にございますか。

鳥居委員：妊娠率が75%というのは、あまり高いようには思えないんですけど。

村上座長：これは明かに妊娠率として低いです。京都、兵庫辺りのデータから比べても、大体85%以上です。だから低いです。

鳥居委員：これはよく分からないですけれども性比の偏りが影響しているというのは考えられるのですか。雄の数が少なくて。

事務局：成獣の雄が少なすぎるということですね。

鳥居委員：それはあり得るのですが。

事務局：あり得ないと思いますけれども。

鳥居委員：発情メスを探して歩いているので。となると栄養状態の差が影響しているでしょうか。

事務局：先ほど数値を載せていましたけど、奈良県の特定鳥獣保護管理計画もやっぱり低いですよね。なぜか奈良県は低い。それで和歌山県と三重県は同じ紀伊半島ですけれど高く出ていて、大台の75.6%という数値は奈良県とほとんど同じ結果です。

小船委員：森林全体の標高差もありますし、植生の違い、シイ・カシ類が少ないということも影響が大きいでしょうからね。

村上座長：そこの部分が効いてくると思うんですけどもね。シイ・カシ類があったらとにかくね、先ほどの栄養状態も高まるし。それから妊娠率も高くなるとね、それともうひとつ密度が高い。密度が高くて、そういうことが入っているのではないかと思いますけどね。他地域よりも、確かに密度多いですからね。

鳥居委員：去年の胃内容物を見ていても、集中的にドングリが出てきて次の日にはまったく出てこなくなる。集中的に食い尽くして、なくなるという感じがしてます。もう一つお聞きしたいんだけど1歳の雌は妊娠率から外してますよね。それってどれくらいの率で出てましたか。

鳥居委員：早い個体は1歳で。

事務局：でも1歳の秋に交尾する訳ですよね。ですから2才で出産する訳です。

鳥居委員：データがとれてないわけですね。分かりました。

村上座長：他にありますか、なければこの話は一度これで終了ということですね。次は平成17年のところですね。

(事務局より資料3「平成17年度調査について」を説明)

村上座長：まず、23ページの個体数調整とその方法について、まず議論いたしましょうか。

ポイントとしては、前年度の積み残しがあるのでその16頭を越えて60頭、44頭を60頭に変更すること、方法に関してはアルパインキャプチャーの場所の変更、並びに図13の下にある既存のシカ柵を使ったシカ捕獲みたいなことを考えましょうと、その2点ですね、それが今の論点です。どうぞ。

小船委員：来年度において現地の柵というのは、防鹿柵の設置予定はないんですか。

環境省：今までやってきた防鹿柵ですか。

村上座長：新設のです。

環境省：前回来年度は大体ここに設置するということで出していなかったと思うので、今回は今年度設置したことと来年度というのは資料をつけていなかったですか。

小船委員：つまり防鹿柵として作ったものを捕獲用の柵に転用することはできないと、趣旨が違うということになっているけれども、私が言っている捕獲柵というのは大きな防鹿柵の全体を捕獲柵に転用するのではないわけで二重柵なんですね。歩いてみて明るくなっているれば一生懸命入るところを探して、口があいてて奥が明るくなっているよく入るんですよ。そういう全体の中の一部分の足跡がよくあるところに口をあけて、そして麻醉銃で捕りやすい範囲の副室を作ることなどですね。既存の柵の中で一部副室的にそういう転用ができるのかどうか、あるいは来年新規に作る柵の中で一部副室にそういうことを考えることは可能なのかということです。で、この下の図にある2つの柵が接近していてその間が通路状になっている、これも捕獲用に利用しようと思えばかなり狭くないと利用できないですね、捕獲の柵は、2つの柵がかなり接近していて、その間の幅次第で可能か不可能かということになってくると思うのですけれども。柵全部を捕獲用の柵という風にするのはなくて捕獲用の柵の一部、一番背の高いところに口をあけて副室を作るということは考えられないかな。

環境省：来年度、シカの柵用に、新たに防除柵を環境省で作ろうということでこのような図を出させていただいている。下のものは小船先生が言わされたように既存の防鹿柵でもしできるところがあればそういう方法も取らせていただければと思いますけれども。自然再生で柵内柵外ということでかなり密接して調査地をとっているところが結構ありますので、そのそばに張ると調査自体の目的が変わってしまいますので。それができそうなところについてはその方法もプラスして考えさせていただきたいと思います。また細かくは、ワーキングでいろいろご意見いただければと思っております。

小船委員：それから糞粒法なんですけども、これはやり直した前のデータですよ。前のデータのところで、やり直したところが120%ぐらいになっています。ですから、当てはめてる分解率が大台よりも少し高いのではないかなど。大台ではそこまで分解が進まないのではないかということはどうなんですか。

事務局：それは考えられます。今回用いたのは岩本先生などが開発した方法で、基本的にはいつの月に行っても密度は変わらないのですけれども、その前提が九州地区ということですので、大台ヶ原に合った、糞消失または糞虫がいつの時期に居るか、居ないかぐらいのことを押さえる必要はあるかもしれませんね。

村上座長：最初の 2 ページの問題点が 2 つあって、ひとつは積み残しをどうするかということで、原案としては 16 頭加えて 60 頭にすると、この点はどうですか。

鳥居委員：やってもらわなければ困ると思います

村上座長：やはり計画をそうしているので、計画を実施していないことで非常に問題になります。それで残れば残るほど後にたくさん捕らなければいけないので、よろしいですか。計画上のシミュレーションの大きな問題としてですね、計画策定時の子連れ率 0.35 というのがちょっと低いですね。それで妊娠率の実績が出てきたんです。0.75 と 0.76 とかですね。その値を使ったシミュレーションをもう一回行った方がいいと思います。それは修正した方がいいかもしれませんね。そのモデルを修正して、それでもう一回やり直してみたらどうかと思うんですけれどもね。

環境省：来年度の計画は今 60 頭ということでつめていただきましたよね。しかし、目標がございますよね。

村上座長：5 年計画ですからね、そういうことでたとえば今持ってる予測値がだいぶ狂ってくるので、そうすると 5 年まではこれでいったのですけれども、その時点で計算していると遅いでしょう。そういう意味です。だから来年度は、ここに反映させません。一応、アイデアとしてはこういう形のデータができましたのでね、なるべく現実のデータを使った形で、現実のものにしていくということをしましょう。それでそこまではそれでよろしいですね。今、議論になった方法の話ですけれども一応これはアルパインキャプチャーと麻酔銃を使った上の話しですね。そのうえで今の新たなことを試行錯誤的にやってみませんか。おそらく北海道の場合は餌付けという効率が効いているのですよ。だからかなり餌付けでシカが集まってくるのですよね。これがどれくらいここできくかというのが一番大きなファクターになるのでやっぱり餌付けしないと無理だと思いますよ。だから一度餌付けしてみてですね、その集まり具合を検討するということをステップとして入れた方がいいと思いますよ。ただ、今ササのところが非常にいい餌場になっているので。そこに別の餌を置いても来るかな。少し塩とかなんかの誘引物を置かないとな。何か彼らにとって魅力的なものを。北海道はやっぱりだいぶ工夫していますよね。いろんなもの使っています。

鳥居委員：餌付けってどれくらいの期間を計画していますか。何を使って。他の動物に影響がでくると困ると思うんですよね。相当長いこと。例えばヘイキューブなど。

村上座長：このことは、北海道だと色々な全国の事情を調べてワーキングの中で話すということで、今回はそういう方法を目指すと。前はくくり罠という話をしましたけど、くくり罠以前にこういうことはすべきだと思うので、ここに書いてあるようなことを考えてみてください。それをオープンにした方がいいと思うんですよ。そういう形にしたうえで実施するという方向でどうでしょうか。

鳥居委員：その前にさっきアルパインキャプチャーの効率が悪かったからと言っていましたよね。もっとも捕獲効率が悪いわけですよ。はっきりしてるとんでもから場所をたくさんいるところに変えるべきだと思います。

村上座長：それは変えるべきだと思いますよ。

鳥居委員：さっきのライトセンサスで一番いるところでやればいいじゃないですか。

事務局：それもあわせてワーキングで検討していきたいと思います。

村上座長：僕も場所の変更はそろそろやるべきだと思います。一回固定した場所へ行きませんよね、と北海道の人も全員言っています。これはもう常識です。シカも賢いですからね。一旦捕まったら、ここはだめだというふうに敬遠していますからね。ほ乳類ですからこっちも頭を使わないと、無理だと思います。

鳥居委員：捕獲方法の（エ）として銃を入れませんか。どうしても 60 頭を捕獲しなければ

ならないのであれば、一応やらざるを得ないじゃないですか。

村上座長：それは去年から、人の安全を考慮して適切だったらやろうではないかという話も出ていましたから、だから銃については安全性だけですよね。

鳥居委員：だから完全にゲートをオープンにする前にやるんです。

村上座長：個体差がありますけれども、プロのハンターだったら大台のシカなんて簡単に撃てると思いますけどね。この辺は獵友会の人と話をしてみるといいかもしれません。

小船委員：南斜面、三重県側の国有林の斜面については、使わせてもらえばいいじゃない。  
それは無理な話ですかね。

鳥居委員：三重県側の斜面は対象外です。

村上座長：それはまずいですね。

村上座長：それも含めてワーキングで、検討というふうにしたいと思います。決めたことは要するに、積み残し分を加えて捕るということと、それを達成するための手段は新たに考へるということで、そのひとつとして捕獲柵のようなものの設置を考えるということで終わっておきましょうか。

村上座長：それでは、モニタリング調査に入りたいと思います。これは1点はですね、テレメトリーで柵の影響とかシカの行動はかなり基本的なことなので、それをとることは必要だと思います。それで4頭に装着しました。まあこれは頭数が少ないのですが、しょうがないですね。それでこれは雌ですね。

事務局：はい、一応基本的には雌と思っています。

村上座長：成獣雌ね。

事務局：はい、成獣です。

鳥居委員：でも、これね、シカ柵をやったことに対する影響だとするとシカ柵がどういうふうに彼らの行動を阻害しているかっていうのは直接見なければダメなんですよ。彼らが忌避しているかどうかというのはとれるかもしれないけど、それはシカ柵を避けて動いているのかっていうのはなかなかでてこない。

村上座長：シカ柵の影響とかを全面に出すというより、むしろどういう餌場を彼らが、空間利用しているかなんですよ。空間利用がどんな餌場でどんなふうに時間を過ごしてたということで、気にして、そのときに柵もあるから当然そこははいりませんからね。その辺をどう考へてるかであらわさないと。

鳥居委員：そうするとものすごい短い間隔でデータとらないといけなくなってしまう。

村上座長：4時間インターバル、だから方法は問題ですけども。とりあえずGPSでどのくらいとれるのか、これが大きな問題ですよね。

鳥居委員：森林地帯にはいったらほとんどとれないと思いますよ。

村上委員：それを心配しているんですがね。だからやれるとしたらオープンなところに居るやつを中心にしたら。

事務局：大台ヶ原の森林を考えたときに4時間でみたら1日6地点と考えればですね、人が追ってデータを取るのに比べたらうまくすれば数十倍のデータが集まるので、その辺で補えるのかなとは思っております。

村上座長：それでも、データがここまでとれなくて、いっぱいミスが起こりますよ。1日1点とれれば僕は上出来だと思いますよ、実際には。

事務局：それは私どももそう思っておりますけども。

村上座長：だからこれは未知の要素がずいぶんあるので今こうできるだろと思っても、実際ちょっとやってみないと分からぬという部分があるので、とりあえず実行してみましょう。そういうシカの動きというののかなり重要なことなので、とり入れるのにむしろ遅すぎたぐらいの感じがしますから。

鳥居委員：僕が言ったのは、年間の動き、大きなサイクルはとれるかもしれない。ところ

が短い一日の出入りの動きだと、これでは絶対とれてこないから、直接観察でくっついてやるぐらいのことをやらないと柵の影響がないから出てこないですね。

村上座長：このテレメで何が判るのか、僕はそれが一番重要だと思っているのだけど、実際にそのデータがどれくらい正確かというチェックを含めてやっておくことが重要なんです。それは絶対にできます。そうしないと、とんでもない結果が出てきてとんでもない解釈をしますから。目で見て確認しておくとその話がこれはこのように嘘だとかね、これは必要なことだと思いますよ。データがとれているのでそのデータを見ながらここにいると予測して見るというのは割と簡単なことだと思いますよ。それはハンディータイプのアンテナでも方探は可能ですね。だから手持ちのアンテナを持って、自分の手持ちでしながら、チェックしていくって一応おとしてみて、そのデータと後で4時間ごとのデータとあわせてみるとかね、そういうのを計画に入れましょうよ。そうすると精度がでますから。まあそれはそういう形でやることにしましょう。それで植生のモニタリングですが、6ページ目の修正点、計画では特に下層植生に関してもう少しちゃんと毎年やりましょうということですね、下層植生はすごく影響を受けますから。これは毎年行いましょう。だからこの修正には僕は賛成ですが、周辺部は2年に一回を5年に一回に減らしているのですよね。

環境省：区域や地域を決めるときにしたので、その程度のレベルでどうかなということで初期値についても重点監視地区については今までとっていなかったのでやらなければいけないと思い始めています。

村上座長：これは生息密度の把握とあわせた形でやろうという話ですよね。

環境省：そういうことです。

村上座長：そうですね。生息密度を5年に一回にしているから植生調査も5年に一回にあわせていきましょう、という話ですね。だからそこを変えようと思ったら周辺部のところに関係しますので、それで周辺部のこととは、奈良県、三重県と話して、少しやるか変更するかなんですね。だからこれはですね、今ここで決めないで、話し合いをした上で周辺部については考えるということでどうですか。その方が柔軟性があつてよいのでは、今ここで決めてしまったら動きがとれないのでしょう。だから僕はここは、周辺部は話し合いの結果を見て、その上で決めた方が良いと思います。今回はペントティングと。それ以外のことは主な計画案通りという形にしたいのですけれどもどうでしょうか。そうしましよう、なるべく決めたことを守りたいので。データ集自体は全部すみましたが委員の方はどうですか。せっかくなので奈良県さん、三重県さん意見をいただけますか。特に今後の扱いについてもかなり話し合いが必要になってくる段階になりましたね。まず奈良県の森林保全課さん。

奈良県：国有林なんで、林道が崩れていまして。

村上座長：林道ですか。それは大変ですね。災害復旧がまだできていない。

環境省：時間がかかるかもしれない。2、3年はかかるというふうに国有林からは聞いている。

村上座長：そうですか。それは大変です。

三重県：県の特定鳥獣の方で、調査を実施したんですが。

村上座長：ちょっと待ってください。三重県は特定鳥獣を作ったんですかね。

三重県：ええ。

村上座長：僕まだ三重県のものをチェックしていない。林道がつぶれるとアプローチが難しいですね。復旧工事の予算はとれたんですか。

三重県：取れていると思いますが。とても1年で直せそうもありません。

環境省：莫大な金がかかるということらしいので、1年で簡単に直せる感じではないと

いう話です。

村上座長：丹波広域林道もね。あれは災害復旧で、今年中に大体できそうだと。これは被害の程度を見るかぎり、なかなか難しい部分ですね。これはしょうがないですね。努力をしてもらわなければ。

環境省：三重県側については、ずらさないと。

村上座長：そうですね、だから奈良県側に優先的にやってもらうようになりそうですね。

環境省：登山道を今ストップさせてていますので、宮川村に下りる方。

村上座長：人に対する危険性があったら一番いけないですからね。しょうがないですね、これはもう論議していただくしかないですね。お願いします、奈良県さん、どうですか。

奈良県：調査地についてなんですけれども、特定鳥獣保護管理計画になってるんですけども、実際に調査地として適当な場所が結構とりにくいくらいもあるんですね。やっぱり道から入ってすぐとか集落から行けるようなところで選ばないと、限られた予算でやってますので、毎度効率悪くなると調査自体が手薄になってしまい可能性が高いので、今もここが抜けているとおっしゃいましたけれどもこういうところを選ばしていただいたんですけども、今後新しい時にきちんとそういうことを考えていかないと効率が悪くなるということと、あと調査地すら選べないという可能性が出てくるかもしれません。

村上座長：前やられてるところがその辺の代表地になるというのが一番理想的なんですかね。ただ、道から直ぐということを条件で入れて代表地になるかというと難しいところがありますよね。

奈良県：あと先ほど林道で帰れなくなつたということがありましたけど、奈良県大台ヶ原とは違うんですよ、上北山村に設定している別の調査地の方の林道がきれましたので、そこも全然入口から入れないという状況になります。すくなからずそういうことも考えて作っていかなければいけないかなというふうには思ったんですけども。

村上座長：奈良県の特定鳥獣計画は、ここに入っているの。

環境省：入っています。

村上座長：その辺のことを議論したいなと思っています。フィードバックしてもらって。やはり環境省を含めた3者間の話がかなり重要ですね。ここで議論してもらつてなるべく全体が把握できるように。やっぱり林道が2~3年後に復旧するしたらそれを含めて、ちょっと長期的なことを考えた方がいいかもしれません。

上北山村：今奈良県さんからおっしゃっていましたように調査地点ですね、昨年は台風でかなり影響がありましたのでそういう部分で方法とかをこれから考えていただきたいと思っております。また、手法についても、よく検討していただいて効率よく実施できるようにしていただきたいと思っております。

村上座長：獣友会の方に来ていただいていないのですが、人の安全を考えたときに銃でとるというのはどうなんですかね。

上北山村：やはりそれは一番だと思います。

村上座長：特定で下の方で捕っているのはすべて銃でしょ。

上北山村：そうですね。

村上座長：各県ともほとんど銃獣ですからね。その方がかえって目標頭数がきっちりしていいと思う面がありますんで。検討は、せざるを得ないです。なるべくここでは銃獣は避けましょうという方向でありますからね。

上北山村：時期とかですね、やはり相当な積雪なので今も実際近づけないというそういうこともありますので、やはり荷物を持ってあがるということも検討していくなければいけないです。何といっても一番は安全面を最優先にして検討していただきたいです。

村上座長：ここについてはもう少し検討してなるべく効率が上がることを考えなくてはいけないですね。他に何かございますか。

三重県：獣友会が出席できなかった理由というのが、昨日か一昨日のすごく直前に連絡が来たというようなことをちらつと聞いたんですけれども。

事務局：獣友会の方に関しては確認の電話を入れたということで、ここに書くためにその確認の電話をしました。

村上座長：獣友会の方特に獣友会会长に来てもらうことは重要なことだと思います。普通は狩猟はその担い手である獣友会の会員とかが協力してくれないとできないですから。そろそろそういうことも含めて獣友会さんにはこの委員会に来てもらうことも考えてもらえませんかね。それで獣友会の人はやっぱり現地のことを良く知っていますよ。今後はなるべく早く連絡して下さい。

なければ会場の方から意見もらえないでしょうか、どうぞ。

会場1：ひとつだけ、主に環境省さんの問題なんですが、この会議の結果がですね、例のニホンジカ保護管理計画というのは自然再生に入りましたよね。そのことによって生じた問題がひとつあるんですが。それは自然再生の保護の基本的な考え方の中に、多様な主体の参画というのがあるわけですよ。で、そうなるとシカの保護管理計画が自然再生の中に組み込まれた以上はこの基本的な考え方というのは当然適応されてしかるべきなんですね。そうなりますと今までニホンジカ保護管理計画でいけば、例えばアルパインキャップチャーの場所は公開しないということを決めましたよね。また委員にも市民代表者は入っていない。だからその辺りの整合性が、自然再生計画の部会、野生生物部会とかなどで検討されてきたのであれば、その時点で論議されるべきだったと思うんですが、突然自然再生計画にこの会議が入りましたので、そのことによって基本的なところで整合性が欠けていたということが生じましたので、主にこれは今後環境省がお考えになることだと思いますけれども検討委員の先生方もそういう問題があるんだということはご承知いただきたいと思います。いえご返議は結構です。その問題点の指摘だけに留めます。

村上座長：そのあり方みたいなものは少し考えましょう。

環境省：自然再生の中に一本化するということにしましたから、またおっしゃる通り多様な参画の精神もありますので。

村上座長：だから再生の利用部会をどうするかとかね、ああいう話も変わりますから。

環境省：できるだけ公開していくとかそういう方向で考えていいきたいと思います。

村上座長：これは検討事項ということで考えさせてもらいます。他にございますか。特になければこれで終わりたいと思います。では、事務局へ。

#### ■閉会の挨拶（環境省自然環境局近畿地区自然保护事務所長）

本日は長時間にわたりまして熱心な議論をいただきまして大変ありがとうございました。ニホンジカの保護管理計画も動き始めてから3年を終わることになるわけですが、今日もいろいろデータの関係でご指摘いただきましたようにデータがまだまだ不足をしている部分があると思いますが、引き続きこのデータの集積に努力をして、年次変化あるいは他地域との関係が見られるような形でよりデータを充実していきたいというふうに思っております。それから17年度に関しては、今年度の積み残しを加えた60頭ということで効率的に作業を進めていく必要がありますが、具体的な捕獲方法につきましてはワーキンググループ等で現地でも検討いただいて具体的にご相談をさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。